



Data 2022-143

監督：ショーン・ペン
原作：ジェニファー・ウォーゲルの
回顧録『詐欺師：私の父の真
実の物語』
出演：ディラン・ペン／ショーン・
ペン／ジョシュ・ブローリン
／ホッパー・ジャック・ペン

👁️👁️ みどころ

“フラッグ・デイ”って一体ナニ？それは、6月14日のアメリカの国旗制定記念日のこと。7月4日の独立記念日と並ぶアメリカの重要な記念日だが、なぜそれが「父を想う日」という邦題に？

“父娘の絆”を描く名作は多いが、“実話に基づく物語”たる本作も、娘の視点からあっと驚く父親像を、ある意味では優しくある意味では厳しく描いているので、それに注目！

フーテンの寅さんは一生独身で通したが、本作の主人公は妻や子供を愛する“最高の父親”。起業欲、事業欲が旺盛でアイデアマン、そして、頑張り屋のこの父親に従えば幸せ間違いなし！のはずだったのに、アレレ、アレレ・・・。

少しずつ化けの皮が剥がれていくその姿に注目！しかして、「フラッグ・デイに生まれた俺は生まれながらにして祝福されている」と信じて生き抜いた男の最後は？男の生きざまはいろいろ！その哀愁をじっくり噛みしめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■フラッグ・デイとは？祝日に生まれると？■□■

『7月4日に生まれて』（89年）は、ロン・コーヴィックが書いた同名の自伝的小説をオリバー・ストーン監督が映画化したもの。同作では、トム・クルーズ演じる主人公の誕生日がアメリカの独立記念日である7月4日だ、というのが大きなポイントだった。1960年のジョン・F・ケネディ大統領の就任式をTVで観て感動した少年は、国のためにベトナム戦争に従軍したが、その後のストーリーは、皆さんご承知の通りだ。

1年365日は世界のどの国でも同じ。また、時間は世界中のすべての人に平等に与えられているから、秦の始皇帝でも市井の男でも、1時間は同じ1時間だし、1日は同じ1日だ。しかし、日曜日を祝日にするのはキリスト教の教えだから、休日の決め方は国によ

って違いがある。さらに、どの日を国の祝日にするかは、まさに国によって異なっている。戦前の日本には、紀元節なるものがあったが、もちろん今はない。また、天皇記念日については色々と変化を続けている。しかし、本作のタイトルになっている「フラッグ・デイ」とは？

それは、6月14日、すなわち、アメリカの国旗制定記念日だ。へー、アメリカにはそんな祝日があるの？ ショーン・ペン演じる、父親ジョンは、誕生日がその6月14日、つまり「フラッグ・デイ」だったため、「自分は生まれながらにして祝福されている」と感じ、「特別な存在として成功する当然の権利がある」と信じていたらしい。しかし、それって自分勝手な思い込みで過ぎないのでは・・・？

■□■ “実話に基づく物語” だが、テーマは父娘の絆！ ■□■

“実話に基づく物語” は多いが、本作もそれ。そして、その実話とは、1992年にアメリカで起きた最大級のニセ札事件。その犯人が、『ミスティック・リバー』(03年)、『シネマ4』251頁)、『ミルク』(08年)、『シネマ22』42頁) で二度もアカデミー賞主演男優賞を受賞しているショーン・ペン演じるジョンだ。本作冒頭、そんなジョンが公判を前にして逃亡したとの報告を警察官から聞かされる娘ジェニファー (ディラン・ペン) の姿が登場するのでそれに注目！

もっとも、本作は冒頭に「Base to on a true story」と表示されるものの、国家による史上最大のニセ札事件を描いた『ヒトラーの贋札 (にせさつ)』(06年)、『シネマ18』26頁) のようなニセ札作りをテーマにした映画ではなく、父娘の絆をテーマとしたものだ。名優アンソニー・ホプキンスがアカデミー主演男優賞を受賞した『ファーザー』(20年) (『シネマ49』26頁) では、認知症の父親と、その父親から「あの男は誰だ？」「お前は誰だ！」「家を奪うつもりか！？」とまで言われる娘との、父娘関係のあり方がテーマとして描かれ、脚本賞、脚色賞も受賞した。それと同じように本作は、アンソニー・ホプキンスと並ぶ名優ショーン・ペンが、実の娘ディラン・ペンとの間のさまざまな父娘関係をトコトン描くものだから、そのテーマ (姿) に注目！

逃走するジョンの車と、それを追跡する多くのパトカーとの壮絶なカーチェイスは TV で実況中継されていたから、それを目にしたジェニファーのショックは大きかったはず。なぜ父親はそんなとんでもない事件を！？自分が子供だった1970年代、80年代の父親はどうだったの？そしてまた4人家族のあり方はどうだったの？

■□■自己評価は良き父親。しかし、実体はアウトロー！？ ■□■

『男はつらいよ』の主人公として、50年間、全50作にわたって活躍し続けた「フーテンの寅さん」こと車寅次郎は、浅丘ルリ子演じるリリーと結婚寸前まで行ったものの、ついに一度も結婚することなく生涯を終えた。

しかし、本作冒頭に見る、娘のジェニファーと弟のニックを連れて、妻とともに車で疾走しているジョンの姿を見れば、彼が幸せな家族に恵まれていること間違いなし！観客は

誰でもそう思うし、妻も子供たちも、起業欲、事業力が旺盛でアイデアマン、そして頑張り屋のこの父親に従えば幸せは間違いなし、と信じていたのも当然だ。ショパンのピアノ曲をこよなく愛するこんな父親の元で育てば、子供たちの芸術的素養もきっと花開くだろう。本作導入部では、多額の借金をしてもそれを上回る事業展開をすることによって豪華な邸宅に住み、一家4人で豪華な旅と豪華な食事をしている情景が描かれる。しかし、しばらく見ていると、アレレ、アレレ・・・。

1960年代は『イージー・ライダー』(69年)や『俺たちに明日はない』(67年)等のいわゆる“アウトロー映画”が台頭した。日本では高倉健演じる『網走番外地』(65年)、『昭和残侠伝 唐獅子牡丹』(66年)がその代表だった。また、1967年の『卒業』の主人公はアウトローではないが、体制内にハマり切れない主人公ベンジャミンをダスティン・ホフマンが見事に演じていた。

しかし、本作の主人公ジョンはそんなアウトローでないばかりか、本人が「俺は良き父親だ!」と自己評価しているところが面白い。ところが、実体はそうではなく、この男もかなりのアウトローだったことが次第に明らかになり、化けの皮が剥がれていくので、それに注目! 事業に失敗すれば、破産宣告を受けて再度やり直し。アメリカでもそれが可能はずだから、借金から逃げ回ってはダメ。まして、妻や子供たちを放置して、自分だけ逃げ回るのは最低かつ最悪だ。それはきっとジョン自身がわかっていると思うのだが、そんな、「自己評価は良き父親だ。しかし実体はアウトロー」たる主人公のジョンは、借金取りの追及から逃げ回りながら、時々自分の都合のいい時だけは愛する娘に対して連絡を入れていたから、娘は迷惑・・・?

■ジョンに対する母親・妻・娘、女3人の評価は?■

フーテンの寅さんには“一家の支柱”という概念は全くなかったが、ジョンはその意識でいっぱい。しかも、一家の支柱としての役割を達成している時が彼の最高の瞬間だったから、本作でも時々見せてくれるその瞬間は、家族全員がハッピーになっていたことは間違いない。しかし、問題はそれが長続きしないこと。しかも、それが崩れた後の跳ね返りがバカでかいことだ。

そのため、そんなジョンに対して、母親は「フラッグデイに生まれた男はクズって決まっている」と言っているし、妻は「パパはあなたが思ってるような人じゃない」と、それぞれ手厳しい。概ね男の評価の方が甘く、女の評価の方が厳しいものだが、母親と妻からの評価を聞いていると、それがよくわかる。面白いのは、父親ジョンに対するもう一人の女である長女ジェニファーの父親に対する評価が常に高いことだ。ストーリーが進んでいくにつれて、当初の、借金をして事業に失敗するだけの父親から、危険な仕事に手を染めている父親の顔が見えてきてもなお、ジェニファーの父親に対する高い評価は変わらなかったらしい。そして、それは父親がアメリカ最大級のニセ札事件の犯人として逮捕されて

もなお変わらなかったからすごい。フーテンの寅さんに対する最大の理解者は、渥美清と同じく50年間、50作も倍賞千恵子が演じ続けてきた妹のさくらだが、まさに本作に見るジョンとジェニファーの関係は『男はつらいよ』に見る、寅さんとさくらの関係と同じだ。

そんな父親ジョンと娘ジェニファーの絆は一体どうやって生まれたの？それを、あっと驚く父親の犯罪者としての姿を突きつけられた娘ジェニファーと共に1970年代、80年代に遡って、じっくりと考えたい。

■□■アイデアマンなればこそ、高度な贖札づくりにも！■□■

嘘をつくのは悪いこと。犯罪を犯すのも悪いこと。そんなことは誰でもわかっている。しかし、嘘をつく奴は悪い奴？そして、犯罪を犯す奴は悪い奴？1960年代には、『俺たちに明日はない』（67年）が大ヒットしたが、同作の登場人物は銀行強盗を重ねるレッキとした犯罪者だから、悪い奴だった。しかし、そんな映画が、“アメリカンニューシネマ”として一世を風靡したのはなぜ？それは、同作の主人公たちは犯罪者で悪い奴ながら、それなりの魅力を備えていたためだ。高倉健が演じた『網走番外地』シリーズの主人公だって、何度も有罪判決を受けて網走刑務所に収監されている犯罪者だが、意外にいい奴で、魅力的だから、不思議なものだ。

それらに比べて、本作に見るジョンは、少なくとも前半では事業に失敗しては夜逃げを繰り返している男だが、決して犯罪者ではなかった。また、夜逃げしていても、次々と次の事業を考え、再登場してくるから、カッコよく言えば彼は不屈の事業家だ。また、その時（だけ）は、家族の前にタププリとプレゼントを持って登場してくるから、良き夫であり、良き父親でもある。しかし、そんなジョンが最後にチャレンジした事業（？）は贖札づくりだったから、ビックリ！

『ヒトラーの贖札（にせさつ）』を観るまでもなく、贖札づくりは大変な技術と大変な元手がいるはずだが、なぜそんな事業（？）をジャックができたの？ジャック自身が、そんな技術を持っているはずはないから、人的資源、物的資源、そして金銭的資源をどうやって準備したの？そこらあたりのジャックの前向きな努力（？）と、それがバレて、ニッチもサッチも行かなくなってしまう男の末路は、あなた自身の目でしっかり確認しよう。

それにしても、ショーン・ペンにはジャックの役が実にピッタリ。“アメリカ史上最大の贖札づくりの犯人”。そう聞けば、極悪非道の大悪人＝犯罪者と思ってしまうが、本作を寅の娘ジェニファーと共にじっくり観ればそんな考えは変わっていくはずだ。もちろん、そうだからと言って、彼の行動（犯罪）を肯定してはダメだが・・・。

2022（令和4）年12月28日記